1446号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2024.5.27
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

がらがら橋日記

宮森健次

堀川遊覧船　1

三月の終わりごろ、教室生の家から「花見に来ませんか」というお誘いがあった。松江名物の一つが国宝松江城をぐるっと囲んでいる堀川だが、その川に面してその家はあり、石垣で区切られた際にある山桜の古木が満開を迎えているというのだ。ぼくがおじゃましたときは散り始めで、風が吹くと裏庭を覆うように作られたウッドデッキや川面の上を白い花びらが惜しげも無く降り注ぎ、風下へと流れていた。

今はもうないのだが、ぼくが通った小学校は北堀小学校といい、その名の通り堀川から百メートルばかり北に行ったところにあった。普通に考えたら、至近距離にある川だから、当時の小学生にとって格好の遊び場であるはずなのだが、景色としてあるばかりであまり接近することはなかった。理由は、汚かったからである。水彩絵の具の緑に黒を混ぜ、水で薄めることなく流し込んだような色と質感は、いかに無知の小学生といえど、川に手足を浸けてみる気など起こさせなかった。泥をさらうと貝が取れると聞きつけて、橋の欄干にランドセルを置いて、何度かドブ臭い川面に下りて掬ってみた。確かに異様に肥え太って黒光りしているカラスガイなどが取れたが、だれもが気味悪がって、そのまま放り投げてしまいになった。

北堀小学校が閉校になって、ずっと北の新設校に移ってしまうと、すっかり堀川とも疎遠になってしまうのだが、皮肉にもその頃から浄化事業が始まって、ヘドロも浚渫され、堀川はきれいになっていった。そして四半世紀を経て、ついに遊覧船が運航されるに至る。運航が始まって三十年近くになるが、もうすっかり松江観光のシンボルになっていて、大勢の観光客を毎日楽しませている。

去年、学生時代のサークルの後輩が堀川遊覧船の船頭になった。教員を定年退職して、ぼく同様しばらくぶらぶらしているうちに船頭募集のポスターを目にしてその気になった。船舶免許を取得し、決して短くない研修を受け、四か月を経て晴れて船頭になったときようやく親しい者たちに連絡をよこしたが、最も想定外のセカンドライフに突入したというので、仲間内ではちょっとした騒ぎになった。

さて、春の日差しと桜の花びらでまぶしい川面に向かってお茶など飲んでいると、目の前を堀川遊覧船がのんびりと通り過ぎていった。乗船客が興味深げにこちらを見ているので、「いい天気でよかったですね」と声をかけると「ええ、ほんとうに」と誰かが答え、乗客全員がにっこりと微笑んだ。まるで近所の会話だ。友人が船頭になったのも、落語教室生が堀川沿いに住んでいるのも何かの縁。思いついた。（続く）

北海道への旅、三度目

木幡智恵美

7

米子を過ぎ、山陰道を鳥取方面に進む。こちらに向かうのは、バイクで北海道に行って以来だから十五年ぶりだ。昨年の十一月に長男の居る御殿場に向かった際は、米子道から中国道に入っている。「あの時は、雨だったな」と夫は十五年前のことを言う。合羽を着てバイクで走ったっけ。その頃は、無料区間と下道とが交互だったが、鳥取まではずっと無料区間になったようだ。

途中渋滞にはまり、夫がハザードを点ける。「最後尾が点けるんだぞ。後ろの車が点けたら消す。交通法規にはあったっけ。皆こうするんだ」と教わる。大山を過ぎ、左手に日本海が見えてくる。大栄町あたりの畑に植わるのは長芋か。

あと鳥取までどれくらいだろうと思っていた時だった。前の車が止まる。夫もブレーキをかけ、スピードがゼロになったと感じた時。突然ドカン！身体に衝撃が走った。「旅行、終わった」隣で夫がうめく。「え、なんで」。何が起きたか分からない。夫が顔をしかめながら、「百十番」と言うので、慌ててポケットから携帯電話を取り出し、番号を押す。この年になって初めての百十番通報だ。「はい、百十番です。事件ですか、事故ですか」の声が聞こえ、「事故です」と答える。テレビ番組でよく出てくる場面そのものだ。「事故の当事者ですか」に「はい」と答えると、「怪我人はいますか」と聞かれる。「運転手が、ぶつかった時にわき腹を押さえて痛いと言いました」と答えると、「救急車は要りますか」。夫に聞くと、「要らない」と言い、続く質問に答えていく。現在位置や車の状況を聞かれたので、車から降りる。午後二時二十分に電話をかけているから日中で一番暑い時間帯だ。なのに暑さを感じない。後方にトンネルが見える。後ろに停まっている車の方から重山トンネルという声が聞こえて来たので、「重山トンネルを出てすぐのところです。側道があり、後続の車はそこを下りて行きます。車の状況は」と後ろを見ると、これは確かに夫の言葉通り「旅行、終わった」だ。「車は動かせますか」の問いには、「壊れた部分がタイヤに当たっているので無理だと思います」と答える。ナンバープレートやら破片やらが車の後ろに散乱している。それ以上にひどく前が壊れた黒い車から、スマホに向かってしゃべっている若い男性が下りてきた。

30代フリーター　裏金事件で追い詰められた自民党が次の衆院選で出してくる切り札は、外交と安全保障は野党にはまかせられないという、昔ながらのキャンペーンだろう。旧民主党政権がつまずいたのも外交・安保だった。

年金生活者　防衛費の大幅増額や敵基地攻撃能力の保有といった急な政策転換に不安を覚える国民は自民党にまかせるのも危ないと感じ始めている。

30代　東西冷戦のもとで日本社会党は東寄りの立場をとり続けた。日本が独裁のソ連や中国の影響下に入ることを恐れる国民が、そんな野党に外交・安保をまかせられないと考えて自民党に投票し続けたのは確かだ。

年金　その一方で、国民はアメリカの言いなりになるのも警戒していた。戦争だけはもうごめんだと考える国民はアメリカのする戦争に動員されることを恐れた。その歯止めとして、社会党に国会で3分の1の議席を与え、憲法9条の改正発議をできないようにした。

自民党はそれをよく承知していて、同盟国のアメリカに対して軍事基地の提供やその費用負担など精一杯のサービスをしながら、アメリカの望む自衛隊の国軍化と、それに必要な改憲は拒み続けてきた。対米従属一辺倒ではないこの構えは吉田茂とその流れをくむ保守本流の基本スタンスであり、国民はそれを支持した。東側に傾斜し過ぎる野党にはできないことだと考えた。だから、選挙になると、外交・安保は自民党でないとだめというキャンペーンが効いた。

30代　安倍政権はそんな保守本流の基本路線をひっくり返したと批判された。集団的自衛権の行使を一部容認する安保法制の制定に続いて、憲法9条の改正による自衛隊の事実上の国軍化を目指した。

年金　岸田文雄はそれに輪をかけるような政策転換をやった。保守本流中の本流の宏池会の出身なのに、安倍晋三が任期中にできなかった防衛費の大幅増額や敵基地攻撃能力の保有に踏み込んだ。対米従属を軸にしながら、対米自立の一面も捨て去らなかった戦後の外交・安保の基本路線を、対米従属一辺倒に転換させた。

しかし、中国の経済・軍事大国化やグローバルサウスの台頭、それにともなうアメリカの覇権の後退で、対米従属一辺倒は東西冷戦時以上にリスクをともなうものになりつつある。

30代　だからといって、すぐに野党にまかせていいと国民は判断するだろうか。

年金　現在の自民党は、中国の台頭やロシアの脅威に対抗しようとして、自衛隊と米軍の一体化を進めるなどますます対米追随を深めている。中国やロシアはそれを警戒し、緊張はいっそう増す。国民はそうした自民党の古い思考に危うさを感じ始めている。

だとしたら、野党が政権を握って外交・安保を担ったとしても、自民党より悪くなる可能性は少ない、と国民が判断することがあっても不思議ではない。もしかしたら、対米追随一辺倒ではない新しい思考の外交・安保へ向かうきっかけになるかもしれない、と考える国民も出てくるかもしれない。

30代　裏金と安保。自民党にとってはかつてない内憂外患だろう。

年金　内と外ということで言えば、富の再分配と国防という国家の2大機能のあり方にほころびが生じ始めている。日本では前者のそれが自民党の裏金事件として、後者のそれが野放図な防衛費の増大となってあらわれている。

いずれも根は同じであり、資本主義の変容がもたらしたものだ。国家の再分配機能のほころびは、GAFAMを始めとする巨大IT企業がネット上に「プラットフォーム」と呼ばれる通信、情報検索、決済などのインフラを築き、国家並みの規模の再分配機能を担い始めたことによる。国防のほころびは、中国の経済大国化とそれを基盤とした軍事大国化によって、アメリカの覇権が後退したことによる。

30代　世界を覆っているのは希望より危機だ。

年金　柄谷行人は、資本主義は「自由主義的」な段階と「帝国主義的」な段階を交互に繰り返し、現在は後者の段階にあると考える（『帝国の構造』）。ふたつの段階の違いは、「自由主義的」な段階ではヘゲモニー国家が存在するのに対し、「帝国主義的」な段階ではそれが不在で、ヘゲモニーをめぐる争いが続くことにある。

ニュース日記　922

中村　礼治

外交・安保は野党にはまかせられないか

柄谷によれば、現在の「帝国主義的」な段階は1990年から始まった。アメリカの覇権の後退でヘゲモニー国家が不在となる一方で、「情報」が「世界商品」として流通し始め、巨大IT企業が「もうひとつの国家」と呼び得るまでに膨張した。

この段階の前の「自由主義的」な段階は1930年から1990年までアメリカをヘゲモニー国家として60年間続いた。経済力でアメリカにはるかに後れを取っていたソ連にヘゲモニーを握る力はなかった。この段階での「世界商品」は家電や家具などの「耐久商品」であり、それは必需的消費の対象と選択的消費の対象の中間に位置した。後者の割合が前者のそれに追いついていく過程にあったのがこの時代だ。

それが冷戦の終結とともに終わった。私たちの国は頼りにし続けてきたヘゲモニー国家を失い、再分配の最大の制度である社会保障の破綻の危機に右往左往している。